

黒崎にいる

日本刀の職人

日本刀は刀匠だけでなく、研師、白銀師、彫金師、鞘師などの職人によって作られる。本町には大野さんのほか、白銀師・飯田光男さんと鞘師・坂井俊文さんがいる。お二人もすぐれた技を持つ刀職である。10月に大和デパートで県内の刀職22人が一堂に会した展覧会が開かれ、大野さん、飯田さん、坂井さんが参加された。※下の写真はそのときのもの。

〈白銀師〉 飯田三男
50歳・鳥原



〈鞘師〉 坂井俊文
29歳・興野



「元から先で研ぐようになった刀身を」に刃を木片に当てて磨きこませる。刀の刃が白くなるまで磨く。



熱する 原料の玉鋼を木炭の灰床に入れ、内部から熱を上げてくるまで熱する。これを焼直し、また熱する。何回もくり返され、刃の良し悪しが決まるといふ。

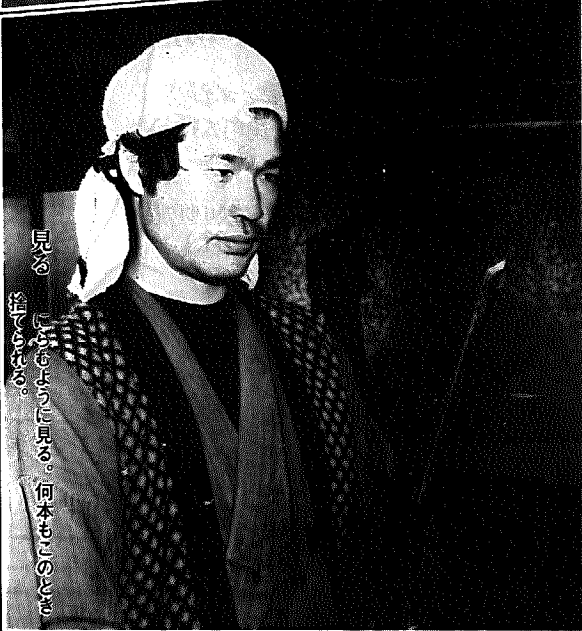


打つ 「柄杓で木片を叩き出せば、刃の適度な粘りを得るまで繰り返す。これを焼直しといふ。

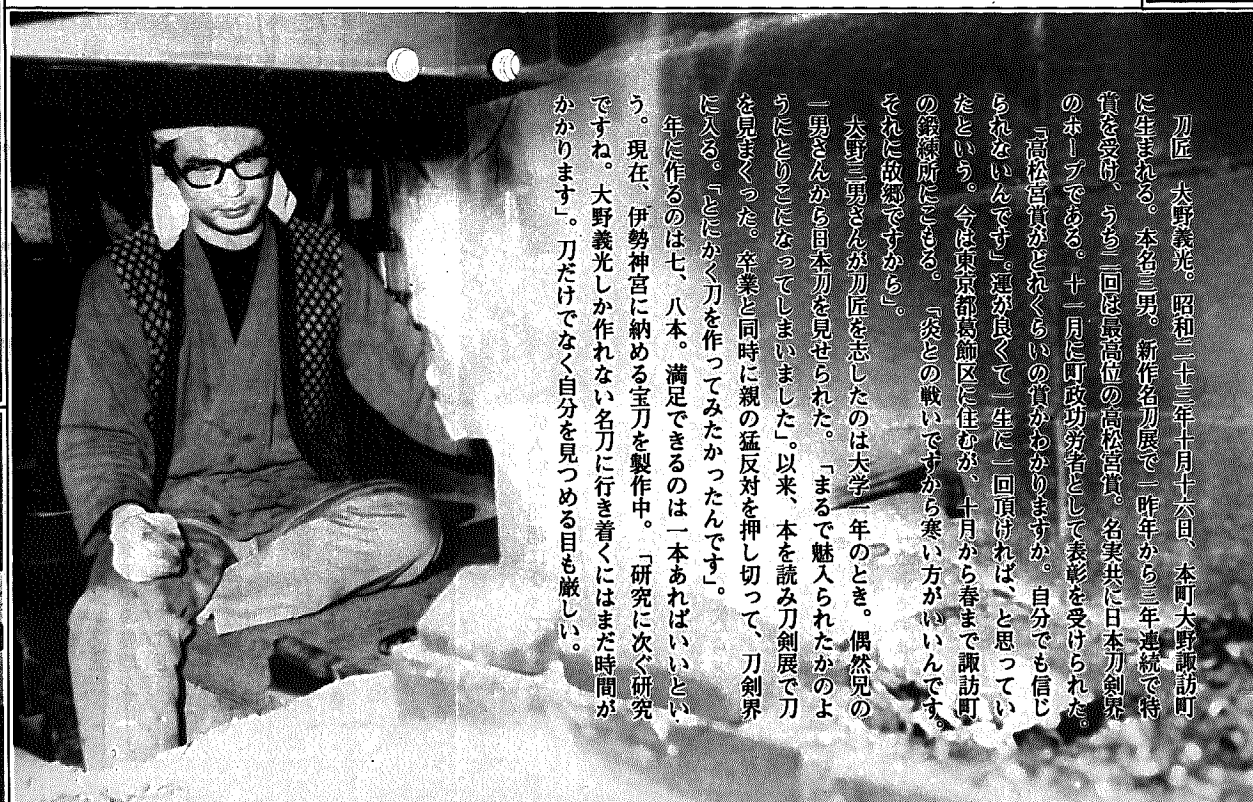
高松宮賞を受賞

刀匠 大野義光

心技を 刀に現わす



見る 「いつもこう見る。何本かの刀を手にする。



刀匠 大野義光。昭和二十三年十月十六日、本町大野諏訪町に生まれる。本名三男。新作名刃展で一昨年から三年連続で特賞を受賞、うち一回は最高位の高松宮賞。名実共に日本刀剣界のホープである。十一月に町政功労者として表彰を受けた。高松宮賞がどれくらいの高かかりますか。自分でも信じられないんです。運が良くて一生一回頂ければ、と思っただという。今は東京都葛飾区に住むが、十月から春まで諏訪町の鍛冶所にもいる。「炎との戦いですから寒い方がいいんです。それに故郷ですから」。

大野三男さんが刀匠を志したのは大学一年のとき。偶然兄の「男さんから日本刀を見せられた。「まるで魅入られたかのようになり、今になってしまいました」。以来、本を読み刀剣展で刀を見まくった。卒業と同時に親の猛反対を押し切って、刀剣界に入る。「とにかく刀を作ってみたかったです」。

年に作るのは七、八本。満足できるのは一本あればいいという。現在、伊勢神宮に納める宝刀を製作中。「研究に次ぐ研究です。大野義光しか作れない名刀に行き着くにはまだ時間がかかります」。刀だけでなく自分を見つめる目も厳しい。

飾る 吸い込まれるかのように刃身は輝く。この短刀は満足しているという

刻む 大野義光という後が責任と自信を現わしている

鍛冶師。大野さん自身で建てた。すべてを一人でやる